

連続講座 カトリック教会と音楽 第2回

永原恵三

教会の年末年始（11月下旬）と春の復活祭との関係

1. 復活祭と典礼暦

カトリック教会だけでなくキリスト教の諸教派では、前回少しご説明した「典礼暦」という暦によって、1年を過ごしています。ちょうど、この記事がアップされる2021年11月下旬は、まさにこの暦での年末と年始にあたります。ここで2021年とわざわざ書くのは、毎年移動するからです。なぜ移動するか、それは、暦の二つの軸の一つである復活祭（復活の主日）にその鍵があります。その点で暦のもう一つの軸にあたる、降誕祭（主の降誕）は12月25日で固定されています。そこで、まず典礼暦における復活祭について少し触れておきましょう。

復活祭は、地球の北半球に住んでいる私たちにとっては、春を告げる行事とも言えます。その日は春分の日と月齢との関係で決まります。毎年、春分の日の後、最初の満月の後に来る最初の日曜日が復活祭と決められています。ご存知のように私たちの暦は太陽暦ですので、月のめぐりとは毎年ずれています。日本人にとってたとえば中秋の名月が毎年異なった日になっているのは、そのためです。復活祭はしたがって、3月の下旬から4月の中旬にまで毎年移動します。前回の資料で添付いたしました、◎カトリック中央協議会による「2021年度典礼暦」によりますと、2021年の復活祭は4月4日でした。それに対して、2022年度は4月17日でかなり遅くなっています。それは、2022年の春分の日が3月21日でその直前の3月18日に満月を迎えるためです。

また、「2021年度典礼暦」を見てみると、「降誕節」の前に「待降節」、「復活節」の前に「四旬節」という期間がともなっています。「待降節」は降誕を準備する期間で、「降誕節」は降誕を祝う期間です。また、「四旬節」は復活を準備する期間で、「復活節」は復活を祝う期間です。このように、暦の軸となっている二つの祭日はそれぞれに準備の期間と祝う期間とを持ち、暦のほぼ半分を占めていることが分かります。そうすると、暦の日付を大きく左右するのが、復活の主日であることが分かります。

2. 灰の水曜日

四旬節の始まりに「灰の水曜日」という日があります。四旬節は灰の水曜日から聖木曜日（復活の直前にある過越の三日間の木曜日）の「主の晩餐の夕べのミサ」まで続く復活祭の準備の季節です。これは入信（洗礼を受けること）の準備および回心の期間としての特徴を持っています（石井祥裕、1998、『新カトリック大事典』、1200 参照）。一般社会的に言えば、悔い改めの季節となります。当然、この期間は典礼の音楽も変化します。

この灰の水曜日は、2月中旬から3月初め頃に位置しますが、この前の日曜日をはさんだ期間、ヨーロッパやラテンアメリカの都市では、カーニバルが開催されます。近年はイタリアのヴェネツィアでのカーニバルが伝えられるようになりましたが、ヨーロッパでもカトリックの地域では大規模に行なわれます。ちなみに、私が文部省（当時）在外研究員でケルン大学に行くための打合せで、初めてケルン大学に訪れたのはカーニバルの時でした。ドイツはプロテスタントの国と思われがちですが、南ドイツはケルンなどの大都市を中心としてカトリックが主流です。

さて、少し、余談となりますが、2020年の灰の水曜日は2月26日でしたが、個人的にも、日本のカトリック教会的にも希有な日となりました。この日の19時からミサが行なわれ、私はオルガンを担当していましたが、ミサ後に教会の運営会議が開かれました。東京教区からの通達を受けて、新型コロナウイルス感染症対策のために、これ以降、教会を封鎖し、日曜平日関わりなく教会に入ることもできず、ミサも信徒が参加できず、教会に集うことができなくなったのです。ミサは信徒が祈りの言葉を発し、聖歌を声を出して歌う場でもありますので、厳しい対策が求められます。したがって、この年の復活祭には誰も教会に集うことができませんでした。明治初期に日本に再びカトリック教会が建てられて以来（潜伏キリシタンは除く）、おそらく初めての事態だったのではないのでしょうか。

現在（2021年11月末）は、かなり状況が改善されているとはいえ、高齢者と基礎疾患のある方々は自宅での祈りが求められていますし、また、ミサにおいても声を発しての祈りや聖歌の歌唱は控える、などの対策が取られています。その代わりに、東京カテドラルや聖イグナチオ教会などの大きな教会から、YouTubeでミサの配信が行なわれる、というこれまでになかったミサのあり方が進んでいます。東京カテドラルでのミサは、大司教の司式で会衆はシスターや修道士などの聖職者に限定されて、聖歌も「イエスのカリタス修道会」のシスターたちが担当されています。音楽学という学術的な立場からすると、大変規範的なミサが公開されるという、ありがたいことになりました。（この形態は、2020年11月1日までですが、東京大司教区（カトリック関口教会）のHPにて視聴できます）

3. 教会の年末年始

教会の年末年始はだいたい11月の下旬に来ます。冒頭で申しましたように、これは毎年移動します。その移動の元になっているのは、復活祭（復活の主日）に他なりません。復活の主日は日曜日と限られています。そして、そこから遡って、降誕祭（主の降誕）の12月25日は曜日は変わりますが、日付は固定されています。しかし日曜日をたどっていくと、そこから4週前の日曜日（2021年は11月28日）が待降節第1主日となります。また、復活祭から下って行って、最後の日曜日が王であるキリストの祭日（2021年は11月21日）となります。ここは前回にも書きましたように、その週の土曜日の日没をもって日曜日となりますので、11月27日の日没で年度が変わるということになります。

4. 教会の年末の音楽

年末の音楽ですが、11月に入ってからの聖歌を考えてゆきます。これは暦の上では年間第32主日、第33主日にあたります。これらの特徴は、アレルヤ唱にもっとも表われていると言えます。『典礼聖歌』の274番「アレルヤ唱」ですが、この終末主日と週日のための曲です。「アレルヤ唱」については稿を改めて詳しく述べますが、ミサのなかでは福音書朗読の前に歌われる曲です。「アレルヤアレルヤ、（聖書の語句）、アレルヤアレルヤ」という形式です。264番から284番まであり、それぞれ典礼暦に応じた曲が歌われます。この274番の旋律はこの時期と死者のためのミサのアレルヤ唱で歌われる固有の曲で、第3旋律で作曲されていて、他のアレルヤ唱とはかなり雰囲気が異なっています。

また、中間の聖書の語句は朗唱形式で歌われますが、たとえば第32主日A年はマタイ福音書24節「目覚めて用意していなさい。人の子は思いがけない時に来る」、第33主日B年はルカ福音書21節「目ざめていつも祈っていなさい。人の子の前にふさわしく立つことができるように」など、厳しい言葉が投げかけられています。この時期に歌われる聖歌としては、411番「わたしは門のそとに立ち」があり、「1. わたしは門のそとに立ち、扉をたたいている。もし声を聞いて門をあけるなら、私は中に入り、あなたとともにすむ。2. 扉の外にはキリスト、心を開いて、神の言葉と愛を受けよう。キリストは今もたたき、心の扉を」となっています。

5. 「王であるキリスト」の祭日の音楽

第32主日と第33主日は終末主日とされるように、まさに世の終わりへと着々と向かう時間の流れが、人びとに対して呈示されています。世の終わりは「王であるキリスト」の祭日で、ちょうど復活祭に対応するように、クライマックスへと至ります。それは、ミケランジェロがシスティーナ礼拝堂の正面の祭壇画に描いた「最後の審判」として位置づけられます。世の終わりの日に王であるキリストが再来すること、そしてその時に「生きる者と死ぬ者とが分かれること」とが実現する、とされる場面です。これは、ミサのなかで全員が唱える「信仰宣言（ニケアコンスタンチノーブル信条）」において毎回確認されていることでもあります。「主は、生者と死者とを裁くために、栄光のうちに再び来られます」の部分です。また、ミサの中心部分である最後の晩餐を記念するところで、司祭の「信仰の神秘」の呼びかけに対して唱えられる「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」における「主が来られるまで」は、このキリストの再来の日、最後の審判の日を指していることとなります。

このように内容的には厳しい終末論的な世界が展開されるのですが、「王であるキリスト」の日の音楽と言葉は、他の大きな祝祭日、つまり復活、昇天、聖霊降臨、三位一体、キリストの聖体などと同じく喜びの表現です。これは、先ほど説明したアレルヤ唱ではっきりと分かります。266番のアレルヤ唱は、「復活後の主の祝祭日アレルヤ唱」と記されているように、上記の日には歌われる聖歌です。変口長調で書かれたこの曲は、他のアレルヤ唱が単旋律であるのに対して、四声部で記され、

合唱で歌うことができ、アレルヤの最後は変口長調の終止形が明確に示されて、堂々とした響きを示します。これは、その後の福音書への導入としても、福音書の言葉を見事に飾り上げている、と言えるでしょう。

この「王であるキリスト」の祭日には、入祭唱として『典礼聖歌』23番「栄光は世界におよび」や147番「天は神の栄光をたたえ」などが選ばれることが多いです。キーワードはやはり「栄光」です。また、閉祭の歌では『カトリック聖歌集』12番「われかみをほめ」を選ぶこともふさわしいと言えます。

6. 「われ神をほめ」 (テ・デウム)

「われ神をほめ」は、元来ドイツ語で歌われていた聖歌“Grosser Gott wir loben dich”が、日本に移入されて日本語の歌詞が付けられたものです。ケルン教区の聖歌集“Gotteslob”によれば、歌詞はイグナツ・フランツIgnaz Franzが1771年にラテン語聖歌の“Te Deum”をドイツ語訳、旋律は1776年頃のヴィーンにあって、1852年にハインリヒ・ボネHeinrich Boneによって現在のかたちになったとされています (“Gotteslob”, 1975/1996, Köln, 317)。ただ、ドイツ語訳についてはすでにルター訳 (Herr Gott, dich loben wir) があり、野村良雄、土屋吉正によれば、この曲は「民衆的な聖歌」(野村; 土屋、1982、『音楽大事典』、平凡社、1553) として流布して歌われるようになったようです。また、英国国教会、日本聖公会でも歌われています。歌詞の元になっている“Te Deum”とは、グレゴリオ聖歌の“Te Deum (laudamus)”「神よ、私たちはあなたをたたえます」で、この祈りの言葉に対して、西洋の多くの作曲家が優れた作品を残しています。日本の『典礼聖歌』では高田三郎が、367番「賛美の賛歌 (テ・デウム)」として、別の日本語訳を用いて、新たに朗唱的な旋律で作曲しています。

7. おわりに

教会の年末は、最後の審判という厳しい日であるとともに、復活して再び来られるキリストの姿への賛美、神の栄光への賛美という華々しい世界が展開されます。音楽は祈りの言葉とともにあって、言葉を美しく飾ることや、その内容を表現するなど、時代や歌い手などによって変化しました。「テ・デウム」は神の栄光をたたえる音楽として民衆の生きる力にもなってきました。日本に伝わった「われ神をほめ」は、ドイツで現在もミサの最後、閉祭の歌として、堂々としたオルガンの響きとともに、力強く歌われています。

最後に、教会の年始は待降節第1主日で、暦がまさに振りだしに戻り、主の降誕を待ち望む静かな世界へと変わります。続きは、来月にいたします。